

「ありがとう」を忘れない

第三小学校 四年

三 善 優 花

私は、学校の遠足で香貫山に登ったことがあります。てん望台から見た沼津の町は、とてもきれいで、私は大好きです。大きな富士山が、緑色のあしたか山をだっこしています。か野川もするがわんも、太陽に照らされてきらきらしていました。

夏休み、明治史料館で戦争の勉強をしました。今から七十四年前、日本は外国と戦争をしていたそうです。私の住んでいる沼津にも、たくさんのおばあさんが落とされて、空が真っ黒になってしまったと聞いて、とてもびっくりしました。木も家も全部焼けてしまって、町には何も無くなってしまったなんて、信じられないです。戦争の話をしてくれたおばあさんは、小学一年生の時、ばくだんから逃げようとして、足にけがをしてしまったそうです。ばくだんの中には、細かい三角形の鉄がたくさん入っていて、それが飛びちって、右足の小指にささってしまいました。おばあさんの他にも、たくさんの方がけがをしてしまって、みんなまとめてトラックに乗せられて、病院へ運ばれたそうです。おばあさんは、小指のきずから毒がまわって、歩けなくなっていました。右足をももから切って、かた足でずっと生活してきました。おばあさんは、みんなに助けてもらって、生きることができ

たけれど、けがをして死んでしまった人もたくさんいたそうです。生きることができたおばあさんも、悲しい気持ちとずっといっしょに生活してきました。きっと、心が死んでしまったみたいなきもちだったと思います。ばくだんが一つ落とされただけで、みんなの体と心が死んでしまうなんて、とてもこわいです。絶対にだめだと思えます。私は、会ったことがないけれど、私のひいおじいさんやひいおばあさんは、戦争の時代に生きていました。きっと、悲しい気持ちといっしょに生活していたんだと思います。でも、一生けん命に生きていてくれたから、今の私がいるんだと思います。私は、

「本当にありがとう。」

と、伝えたいです。

私の大好きな、きれいな沼津の町が、何も無い町になってしまうなんて、絶対にいやです。

「ありがとう。」

という気持ちを、いつも忘れないで、山も川も海も人も大切にしていきたいと思えます。

今のぼくは平和である

第三小学校 六年

清水 咲 杜

終戦から六十二年後の二〇〇七年にぼくは生まれました。戦争のことは、ぼくのおじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さん、もちろんぼくも知りません。ぼくは、何でそんな戦いをしていたのか不思議でした。勝つても負けても、両国の人々が亡くなってしまう、そんな戦い必要ないと思います。

戦争によって日本の人々は貧しい暮らしをしてきました。そして、行ったら死んでしまうかもしれない、人を殺さなければならぬかもしれないというのに、国のために戦争に行かなければなりません。たくさんのお人を犠牲にしたこの戦いは、果たして国のためだったのでしょうか。

ぼくは今、大好きなバレーボールをしたり、友達とゲームをして遊んだり、おいしいものを食べたり、好きな洋服を着たりして、何一つ不自由のない生活をしています。それが当たり前のことだと思っていました。しかし、それがすごく幸せなことだと分かりました。戦争の時代に生きていた人々はお米十粒ほどの雑炊が食事だったり、国民みんなが同じ服を着たりする、そんな生活をしてきました。

二〇一一年三月十一日に東日本大震災という大きな地震と津波が起

きました。戦争とは全くちがう形でたくさんの人々が亡くなりました。大切な家族や友達を失ってしまったたり、家が流されてしまったり、大切にしていた物が流されてしまったりしました。ぼくと同じ時代に生まれその震災を経験した人がいます。とても悲しい思いや、辛い思いをしたと思います。ぼくは、戦争も震災も経験していません、実感がありません。しかし、テレビなどの映像や体験談などを見聞きして、自分の今の生活を振り返ってみると、反省しなければならぬことがたくさんあると思いました。当たり前の生活ができていることに感謝したいと思います。

平和に暮らすということはかんたんなようで、かんたんではありません。いつぼくの住む町に震災などの災害が起こるかは分かりません。だから、これからぼくは、物を大切にしたり、食べ物をもつにしたりしないで、平和な暮らしがしていけることに感謝して生きていきたいです。

平和と聞いて

第三小学校 六年

庄 司 安 慧

平和と聞いて、一番に思いかぶのが戦争でした。なぜ、平和と戦争は反対の言葉なのに、平和と聞いて、一番に思いかぶのが戦争な

のかを不思議に思いました。

ぼくは、戦争を体験してないので、戦争を知りません。しかし、戦争は戦い合ったり、たくさんの人がなくなったりして、良いことではないことは知っています。それは、戦争体験者から、戦後に生まれたぼくたちに語りつがれているからではないかと思います。ぼくにとつて、一番身近な戦争体験者は、ひいおばあちゃんです。

ぼくは、毎年、お盆になると、お墓参りに行きます。お墓に行くと、一般のお墓とは別に戦争でなくなった人たちのお墓もあります。

ぼくの前祖も戦争に行つて、なくなつてしまつたそうです。そこに行くつと、戦争を体験しているぼくのひいおばあちゃんは、戦争のことについて少しだけ話してくれました。たくさんの人がなくなつたことや、沼津でも空しゅうをうけたという話です。

また、ひいおばあちゃんの家には、ぼくの前祖の写真がかざつてあり、その中には戦争でなくなった人の写真もあります。ひいおばあちゃんは、

「この人がいつもお墓参りに行く戦死者のお墓の人だよ。」

と教えてくれました。

ところが、昨年秋に、ひいおばあちゃんはなくなつてしまいました。だから今年のお盆は、ぼくたち家族、おじいちゃん、おばあちゃんとお墓参りに行きました。

毎年、戦死者のお墓に行くと少し悲しくなつて、そしてこわくなります。戦争は、だれかの命や大切なものを、こわしてしまふかもしれない

し、だれかに、自分の命や大切なものをこわされてしまふかもしれない。

そして、生き残つた人たちの心の中にも、戦争の悲しい思いがきつとあると思います。戦争をして幸せになつた人は、いないと思います。だからぼくは、戦争がおこらないようにしたいです。

ぼくたちの周りには、戦争のことを知っている人がだんだん少なくなつてきています。だからぼくは、戦争のことをもっと勉強して、二度と戦争がおこらないように、りつばな大人になりたいです。昔あつた悲しい歴史をわすれないようにしていきたいです。

令和へつなげ！平和

第五小学校 四年

松 金 郁 玖

今年の夏、ぼくは初めて「戦没者を追悼し平和を祈念する日」の式典に参加しました。

きっかけは、将棋友達が平和を考える作文を朗読するので、聴くためでした。友達の作文の他に、い族の人の話も聴きました。戦争のざんこくさが、ひしひしと感じられてきました。戦争、これはただごとではない。戦争のことをくわしく知らなかつた自分が、はずかしくなり、自分で調べてみることにしました。

空しゅう、防空ごう、赤紙、そ開、とっこう隊など、知らない言葉が次々とでてきました。とくに、とっこう隊について、二十代前後の若い人がかた道のねん料しか積まず、相手にとつげきして道づれにする。これにはおどろき、むねがしめつけられました。

「お国のため」

当時、日本人だれもがこう思っていたそうです。後に、ぼくの親せきにも戦没者がいて、中国へ行ったきり、戻ってこなかったそうです。これ以上、くわしく聞くことはできませんでした。きつと悲しすぎて、話すのがつらかったんだらうと感じました。

ぼくが今住んでいる沼津も、空しゅうによって多くのひ害を受けました。あちらこちらに戦争のつめあとがのこっています。そのような場所を訪れると、まるで「ぜっ対に戦争はしてはならない」と、うつつたえかけているような気がしてきます。

日本国内で戦争を直せつ知らない人の方が、多くなってきました。戦争のおそろしさをもつともつとみんなが知ってほしい。戦争をしたって何もいいことはなく、のこるものは悲しみや苦しみ、失望だけだと。終戦した昭和、平成、令和と時代は変わり、ずっと不戦をちかつてきた日本で、これからもその思いが、一人でも多くの人に広がっていつてほしいと願います。

ぼくたちは、戦争でぎせいになった人々の上に今の平和があることを、決してわすれてはいけません。

学校で学べることの大切さ

開北小学校 六年

大嶋 翠 乃

普通の女の子がスクールバスに乗り、友達と話していると、銃で武装した男たちがバスに乗りこんできました。「マララは、どこだ」と叫び、そのバスに乗っていた、マララ・ユスフザイという少女が、銃げきにあってしまいます。その後、命はなんとか取りとめたものもの、タリバンという組織の命令で、女性には学校に行ってはいけないことになりました。マララは、学校が大好きでした。そして、勉強をしたいといつも思っていました。

私は、この本を読んで、勉強ができるって、幸せなのだろうかとか、考えてみました。私は、週に五日間学校に通っています。学校では、国語や算数、社会や理科などを学ぶことができます。国語では、詩や説明文などの筆者が伝えたいことや、問いの読み取り方を学んで、友達が自分の意見を発表しているのを聞いて、自分の考えとちがった時にはノートにメモをしたりして、次の授業の参考にしています。

では、学校に行けなくなるとは、どういうことなのでしょう。算数で新しい計算の仕方や考え方を学んだり、国語で文章を読んで筆者の伝えたいことを考えたり、社会では、昔、どんなことがあって、現在につながっているのか、そういうことを学べないということですか。

それに、学校では、友達と話したり休み時間にいっしょに遊んだり、運動会のために、みんなで力を合わせて練習したり……。学校に行かなければ、こんなこともできないのです。

マララは、学校で勉強するために、世界にうったえ続けました。安全のために引っこした先でも、タリバンのしゅうげきにあい、イギリスの病院に入院することになりました。

何度もしゅうげきにあつたら、私ならもう、学校で学ぶことは、あきらめていたかもしれません。でも、マララは、強い思いをもち続け、決して学ぶことをあきらめませんでした。

私は、この本を読んだことで、学校で学ぶことは、自分が今まで思っていたよりずっと大切なことなのだということがわかりました。新しいことを学んで、知識が増えたり、友達との友情が深められたり、いろいろなものに出会える場所が学校なんだと、気づきました。

テレビを見ていると、戦争で町がめちゃくちゃにこわされ、そこに住んでいた人は、食べ物にも住む家にも困っていると伝えていました。そんな中では、命を失わないようにすることで精一杯で、学校で学ぶことなんてたぶんずっと先になるのではないのでしょうか。世界には、そんなふうな学校に行けない子がたくさんいるそうです。そして私は、平和で安心してくらせる日本に生まれたので、少しぐらい難しい問題にも、がんばって取り組み、友達と笑顔で生活したいと思いました。

一つの爆弾が生んだ悲劇

片浜小学校 六年

脇 昊 空

私は、「ナガサキの命 伝えたい、原爆のこと」を読んでみて、改めて命の大切さを知りました。

その中で私が最も感動した場面は、二つあります。

一つ目は、一人の女の子の家族が原爆で大きな被害を受けたけれど、くじけずに前へ進む姿がえがかれていたところです。もし自分の家族が原爆などに巻きこまれ亡くなったら、もう前に進むのがこわくなってそこにずっと立ち止まってしまおうのではないかと思いました。けれど、私は、目の前に大きな壁があつたとしても、前に進めるような勇気が出ました。なぜなら、こんな小さな子でもがんばっているなら、自分もがんばらなないと、思ったからです。

二つ目は、何の罪もない多くの人々を犠牲にしたところです。私は最近テレビで、場所は遠くなってしまうけれど、長崎県に原爆が落とされる三日前に原爆を落とされた広島県について紹介している番組を見ました。なぜこんなことをする必要があるのか未だに疑問です。広島や長崎の人々は、アメリカの飛行機が通るだけでもおびえているのに、その上みんなが楽しく過ごしていた生活をうばう必要があつたのか。たった一つの爆弾がいきなり落ちてきて、多くの人々が「熱い

よゝ。」とか「苦しいよゝ。」とか、「水をくれゝ。」と叫んで、それを見たとしても、楽しいとは絶対に思えません。そして、ようやく暮らしても安定してきたかと思えば、今度は放射線におびえている姿を見て、胸がいたみました。同じ人間なのに、どうして争う必要があるのか考えてみたけれど、起こってしまったことは、時間ももどせないから結局は、どうにもできないという答えになってしまいました。

けれども、私はこの本を読んでみて、この先戦争のない世界を作りたいと思いました。なぜなら同じ人間が争う必要など絶対ないのです。親は子供にむやみに虫や動物を殺すなど教えるくらいなのに、戦争だからといってそれだけで、国のために死んでくれだなんておかしいし、人は動物ではないのだから言葉で話し合いができるはずですよ。どうしても話が合わないのなら、戦いもせず関わらなければ良いのに。なぜ他の人を巻きこむ必要があったのでしょうか。他にも、原爆を落とすまで何かをやる必要などないと思いました。

だから私は、戦争とか原爆とかが無い世界を作りたいのです。そんなことは、偉い人とかでなければ難しいことかもしれないけれど、誰にでも可能性はあるのだからあきらめなければ良いと思いました。たとえ、ふみつぶされそうになったとしても、立ち向かうことができると思います。

これからは、長崎や広島で起こった悲劇を世界中の人に伝えていきたいと思いました。

当たり前という平和

片浜小学校 六年

渡 邊 汐 音

あなたは、平和と聞いて、何を思い浮かべますか？

朝、起きて食べる朝食

水道をひねれば出る水

着る服があつて、はくくつがある

学校へ行ける

友達がいる

帰る家がある

「おかえり。」

と言ってくれる人がいる

温かい夕食

きれいなお風呂

安心してねられる

最低限の当たり前前だけど

今を生きる私たちの当たり前前

大豆十五つぶと水だけの食事

爆げきで燃えてしまった学校

空しゅうにおびえてねられない夜

七十年以上前

日本が戦争をしていたときの当たり前

何の罪もない同級生が亡くなった

同じ民族、いや人間なのに争っている

未だに戦争をしている国の当たり前

自分が幸せになるために

だれかが亡くなる

そんな当たり前は嫌だ

世界中のだけれど

自分が望む当たり前になってほしい

いつまでも平和に

金岡小学校 五年

川原楓羽

いつまでも 平和に

すごしていたい 昔みたいに
ならないように

原子爆だんで亡くなった人

大けがをした人

かぞえきれないほど たくさんいる

でも それがふつうだった

戦争で一番こわい 原子爆だん

平和な今もある

それを使わないでくれ

私たちは いのることしかできない

いつまでも 平和に

すごしていたい

あしたも あさっても

来月も 来年も

ずっと つまらな

一日でいい

そのために 私たちは今日も

いのり続けるんだ

あしたも あさっても

来月も 来年も

いつまでも 平和に

戦争

金岡小学校 五年

佐野倅捺

ある時、こんなことがおこった

それは、戦争だった

多くの人々の命は

まるでけむりのようにさっていった

家や建物はまっ黒になり

ボロボロになってしまった

辺り一面焼けこげたあとしか

のこってなかった

地面には焼かれてしまった人々ばかり

体にあながあいてしまった人

手や足など焼かれて無くなってしまった人

とても悲しい状態

にげてきた人は

目やくちびるなどがふくれ上がっていた

川などを使ってにげて来た

にげて来た人はみんなで協力し

助け合っていた

助かった人の中でも

死んでしまった人も中にはいる

家や町などは焼けこげているあとだけ

助かった人の中で

家族を失った人もいる

そんな悲しいことはない

戦争はいつ起こるか分からない

とつぜん起きる悲しい出来事

戦争は多くの人々の命をおそう

町は火やけむりでいっぱい

明るい町が黒のけむりでとざされた

戦争

金岡小学校 五年

杉山 凜

広島へ原子爆弾落とされた

人々は大きなほのおから

にげてにげてまたにげる

同じ様な悲しい光景が

次々と広島へ広がり

広島へ原子爆弾落とされた

人々を追う大きなほのお

追って追ってまた追う

まるでほのおが

人を食べていく様だ

次々と苦しんでいく様子

現代のわたしたちの目に

焼きつけた

広島へ原子爆弾落とされた

人々は泣いて苦しみ

足からくずれていく

目をとじる者もいる

家族 友達 失う者もいる

わたしたちに

いたみ 様子は分からない

けれど感じるもの

分かることがある

感情だ 思いだ

家族をなくした思い

友達をなくした思い

その場でたおれている人

いろいろな思いだ

そこにたくさんの光景がある

だから感じようとすれば

いくらでも

いくらでも

感じるものがある

伝わってくる思いがある

戦争のこわさ・平和について

愛鷹小学校 五年

坂田 明日海

私は「ガラスのうさぎ」という本を読んで戦争は人や大切なものなどたくさんのおそろしさをこわしてしまおうとおそろしく、絶対にやっつてはいけないことだと改めて思いました。

私は「ガラスのうさぎ」から思ったことがあります。それは、わかい男の人などは、行きたくなくても戦争に行かなければならないことです。病気があって、行けない人もいて、その人にとっては、それはそれでつらかったと思います。でも、自分から行きたいという人もいて、私は勇気があってすごいと思いました。

大都市に住む子供達は、敵のこうげきをさけるため、学童そかいと

いって親からはなれてくらすことになります。もし、自分がそかいをする事になったら、すごく不安な気持ちになってしまうと思います。なぜなら、家族が今どうしているかと心配だからです。

軍隊に入ると、自分の命は、国にささげたことになり、死ななければならぬ時は、きちんと死ななければいけなかったそうです。また、昔は、戦死するとみんなでもろこんでいたそうです。そこで私は、すごく悲しい気持ちになりました。生きてくても死ななければならぬこと、日本のためにだれかが亡くなるとみんなでもろこんでいたことはすごく切なく思いました。

一九四五年三月九日。東京にアメリカのばくげき機B29があらわれました。みんながいっせいに防空ごうへとにげこみました。耳をつんざくけいほう。雨のように空から落ちてくるたぐさんの焼いだんのばく発音。防空ごうの中で大勢の人が、身をよせ合っておびえていたそうです。焼いだんは、建物をもやして火事をおこし、人間も何もかも焼きはらってしまうばくだんで、強い風がふいて町も火の海となり、防空ごうの中は、ばく発の時のけむりと熱気で息苦しくなったそうです。私は、それを想像するだけですごくこわくなりました。

最後に私は、この世界が、このまま平和な暮らしが続ぎ、楽しくくらせる世の中であってほしいと強く思いました。

「禎子の千羽鶴」を読んで

内浦小学校 四年

菊地 八雲

「お父さんも行ったことがないなあ。じゃあ、広島にするか。」

夏休みの旅行は、家族みんなが行ったことがない広島に行きました。ぼくは、原ばく資料館に行って、一九四五年の八月六日の朝八時十五分に広島街に原子爆弾が落とされ、どんなことになってしまったのかを知りました。「禎子の千羽鶴」は、資料館で買った本です。なぜ、広島市の平和記念公園にある女の子の像は折り鶴をささげもっているのか分かる本です。

女の子は禎子さんといい、二歳の時に原爆が落ち、ひばくしました。でも、その後は元気で小学生の六年生になると、体育が得意な禎子さんは運動会リレーで大活やくしていました。けれども六年生の冬、原爆症の症状があらわれてきます。ぼくは、原爆が落ちて戦争も終わって十年もたっているのに、原爆の放射能が、皮ふがんだり白癩病にさせしてしまうなんてひどいと思いました。お父さんとお母さんはお医者さんから禎子さんは残り三か月、長くても一年ほどの命ですと言われます。そして、二月に入院することになります。

ぼくが一番に残ったのは、禎子さんが白血癩病とたたかいたながら鶴を折っている場面です。鶴を千羽折ると願いがかなうと知って、折り

始めます。最初の千羽鶴は、自分の病気が治るようになってほしいで折ったのですが、次の千羽鶴は、借金で苦勞しているお父さんのために折ります。

ぼくは、禎子さんは、とても思いやりがある、家族を大切にすることだと思いました。自分が病気でとてもつらいのに、お父さんのために薬を買ってきてあげます。病気でとても体が痛いのに、お金がかかってしまうからと痛み止めの薬をこわります。

白血球を増やさないようにする輸血には八百円、痛みを和らげるコーチゾンの薬には、二千円もお金がかかります。そのころお米一升が百円だったそうです。今だと約三〜四倍の金がかかっています。生活が苦しいなかでもお父さんやお母さんは、禎子さんの薬代のために家財道具や腕時計を売ってお金を作ります。ぼくは原爆症をぜったいに治す、やつつける薬を禎子さんにあげてほしいと思いました。

この本の作者の佐々木さんは、禎子さんといっしょにいたお兄さんです。ぼくはお兄さんはこわい、恐ろしい、悲しい体験をしたと思います。この本には、家族を亡くした佐々木さんの、戦争をしないでほしい、原爆を二度と落とさないでほしい、禎子さんのように亡くなくてしまう人がいないでほしいという願いが込められていると思います。

ぼくも、二度とないように願っています。

戦争に行った人への手紙

浮島小学校 五年

落合心導

戦争に行った人へ

今のぼくは幸せです。

けんかもするし、怒ったりすることもありますが、食べ物をおなかいっぱい食べられます。夏休み中に、明治史料館ですいとんの作り方を教わって、作って食べました。まずいとは思わなかったけど、すいとんを食べられるだけで幸せという話を聞きました。実習が終わっておやつにアップルパイを食べました。夕飯には、家族みんなでお好み焼きを食べました。おかわりをして、おなかいっぱい食べました。

ぼくにお話を聞かせてくれた岩下さんは、焼い弾で片足を失ってしまいました。岩下さんたちは、何の罪もない人たちです。いたかったと思います。熱かったと思います。罪のない人たちが苦しんでいるのはおかしいと思います。

焼い弾とは家の中を火事にするためのものでした。まず、飛行機から落とされたときに先たんの鉄がかわらの屋根をやぶります。そして、家の二階の床にあたり、ゼリー状にしたガソリンに火が付いて、その家を火事にしてしまいます。さらに、アメリカ軍の戦う飛行機は、

一万メートルの高さまで飛べるのに対して、日本の撃ついる大ほうのとどく高さは七千メートルだったそうです。戦場でも差は明らかだったのでしょうか。そんな中、こわがらずに戦ってくれたのですか。

戦争は何も自分のためにならないし、得することだつてほとんどないのに「戦争に行かなくてはならない。国のために戦わなくてはいけない。」と思つて行つたのですか？それとも「非国民」と言われてしまうから、仕方なく行つたのですか？たぶん日本のために家族や友達との別れを選び、ぼくたちや未来のために「自分は死ぬかもしれない」と思つても決だんしてくれたのでしょうか。

ぼくは、日本に戦争なんてしてほしくないとします。毎日すいといんを食べるのはいやだし、焼い弾が落ちてくると思つたら、ゆっくり眠れませんか。

戦争は、岩下さんの足をうばいました。たくさんの命を失います。学校でも、けんかやもめごとがあると話し合います。家でも、決して暴力で解決してはいけないと言われています。ぼくたち子どもでも力で解決することはいけないことだと知っているのに大人が戦争をするなんて、ぼくたちの見本になつていないと思います。

まず、ぼくたちのクラスから力で解決しない方法を始めていきます。力で解決しない日本へ、力で解決しない世界へと広げていきます。戦地へ行つて、今の日本の未来をつないでくれて、ありがとうございました。けんかなどをやめて、みんなで平和を守ります。

かこと未来へ

とどけ この思い

浮島小学校 五年

野口 心菜

「戦争なんて、なければいいのにね。」

この言葉は、私のひいおばあちゃんが私に言った言葉でした。ひいおばあちゃんは、昔戦争を経験しました。たくさんの焼いだんが落ちてきて、たちまち町に火がもえ広がりました。みんな家も何もかももえてしまい、ひいおばあちゃんは、

「まるで地ごくだったよ。」

と、言っていました。それを聞いているだけでぞっとしました。そんな中、ひいおばあちゃんは、お金も何もなく、はだしで線路をひたすら走り、なんとか助かりました。それからひいおばあちゃんは、何もない「0」^{ゼロ}からスタートし、がんばって働き、幸せな家庭をきずくことができました。

でも、戦争は良いものではありません。なにも良いことがありません。たとえ、戦争に勝ったとしても、罪悪感でいっぱいになります。負けたとしても、なんのために命をそ末にしたのかと、苦しみます。たくさんの人の命よりも、勝ち負けの方が大切なのでしょうか。私も戦争がいやです。でも、国のため、国のみんなのために戦った人たち

は、もつといやだったと思います。けれど、その人たちが全力で戦ってくれたおかげで、今の自分たちがいます。

私は、戦争で死んでしまった人に伝えたいことがあります。それは、これから先の日本のことです。これから先は、私たちが日本を守ります。絶対に戦争なんて、起こしません。だから安心して、天国でねむっててください。

また、これから先の日本をになう人にも、伝えたいことがあります。これから先の日本を明るくするには、たくさんの人、一人一人が「平和」という大切なことに気づいて生活することが一番良いことだと思います。だから、小さなことで争わず、みんな協力していきましよう。

この思いが、たくさんの人々とどくとともに、私自身もできることを心がけて生活し、少しでもこれから先の日本のためにがんばっていかうと思います。ひいおばあちゃんのためにも、戦争で死んでしまった人のためにも、これから先の日本をになう人たちのためにも。

平和への道

門池小学校 四年

藤 島 妃 那

私は、戦争について知っていたつもりでした。でも、「ガラスのうさ

ぎ」をよんで、戦争とはとてもおそろしく、とてもさびしいものだと分かりました。

昭和十六年十二月八日、今から七十八年前のことです。日本は戦争に勝ったと思いきよるこびあつていました。でも、昭和十八年の二月、ガダルカナル島の日本軍全めつの知らせがとき、また戦争が始まりました。毎日ばくだんがおとされ、日本はやけ野原になってしまいました。とくに、広島と長崎は新がたのばくだんが落とされ、とても多くの人が亡くなりました。私は、関係のない人が亡くなり、とてもかわいそうだと思います。家族が病気になるたり、戦争に行つて亡くなつたりした人も大ぜいいたようです。また、住む場所もなくなり、そかいする子どももいました。親せきのほうにいても家がもえてしまつたり、めんどうもみてもらえなかつたりしました。だから私は、そかいはぜつたいにしたいと思ひました。そして、ごはんもしつかり食べることができませんでした。食べられる物はだいたい豆や、ふかしいもくらいでした。みんなで分けあつて食べたのでまんぞくするりょうを食べられませんでした。私たちは、今十分にごはんを食べることができません。今では、当たり前なのが戦争中はできなかったと知つておどろきました。昭和二十年、やつと戦争が終りました。私は、四年も戦争が続きたくさんの人々がぎせい者になつてしまつたことが、とてもいやです。もう、二度と戦争はおきてほしくはありません。私は、戦争がおこらないように他の国と日本が仲よくできるかんきょうをたもちたいです。私は、まず友だちと仲よくしていくことが、だい一歩だと思ひます。相手のことを思ひやり、自分を知つて

もらうことが大切です。たくさんのお話をしておたがいを理かいます。ことで戦争にならないようみんなを考えていけたらいいと思います。

戦争が起きた後

今沢小学校 六年

古屋 愛花

ゆっくり寝られるのも

のんびり食事できるのも

当たり前を感じる今日も 戦争が起きると

当たり前じゃなくなる

昨日まで安心して寝られたのに

昨日まで楽しく食事していたのに

いきなり奪われた平和な日々

今まで考えたこともなかった

平和な日々が無くなってしまったのも

いきなり大きな音が鳴った

ドカン ドカン

さっきまで一緒にいたのに

家族が 友達が

手があったのに

自分の腕から血が出ていた

一瞬何が起こったかわからなかった

急に痛みがきた

怖い 恐ろしいと思った

あれから何年たっても忘れない

忘れちゃいけない

二度と起こしちゃいけない

他の国だけが悪い訳じゃない

自分の国も何かしてしまったんだ

でも普通に生きていた人までまきこんでしまう

一度死んでしまったらもう生き返らない

過去を変えることができる

でも

未来を変えることができる

戦争が起きず

平和にくらせる

当たり前の日々を

作ることができる

みんなが楽しく 笑顔でくらせる

とっても豊かな土地もあって

お腹いっぱい食事ができて

争いが起きない未来を
幸せな日々を

八月六日という日

大岡南小学校 六年

駒形天音

私の誕生日は、八月六日です。私はこの日が誕生日というのがずっとイヤでした。なぜなら、その日は日本人にとって、とても特別な日だからです。朝からテレビでは追とう番組ばかり流れ、なぜだか重たい息苦しいような気持ちになってしまふのです。

私はまだ広島に行ったことがありません。でも、近くの中学校の文化祭に行った時に、広島のことを調べた展示物を見ました。様々なことが調べてあり、写真や絵で説明がされていました。りっぱな建物が骨組みだけになってしまふ原子ばくだんを人々が住んでいる町に落としたのは、人間だったことを知りました。私は、その事実にとてもびつくりしました。「人」がエノラ・ゲイという飛行機に乗って原ばくを落としたのです。私と同じ家族や大切な人がいる人間が、あのような兵器をどういう気持ちで作ったのかなあと思いました。そして、エノラ・ゲイに乗った人は、ばく発する町を目にして何を感じたのだらうと思いました。

今年の誕生日もテレビでは、被ばく者の人がなくなった友達に書いた手紙を朝から番組で流していました。そこには、「自分が生き残って申しわけない」と書いてありました。妹も被ばくして病気になる苦しんでなくなつたそうです。その人自身もたくさん苦しんで辛い思いをしながらせつかく生き残つたのに、申しわけない気持ちになるくらい、生き残つたということに罪の意識があるなんて悲しいです。戦争というものは、人の心も殺してしまうものなんだなと感じました。そして何十年たつても、体だけではなく心までずっとときぎついたままなんだと思うと、私の心の奥の方がズーンと重たくなつてきました。

エノラ・ゲイに乗っていた最後の生存者は

「同じ過ちをくり返さないために。」

と言っていたそうです。平和記念公園のいれいひにも、「安らかに眠つて下さい 過ちは繰り返しませぬから」と刻まれています。私は、原ばくを兵器として作ったのは「過ち」だったと、ずっとずっと後の世まで語りつぐことが平和への一歩になると思います。

いつか原ばくが無くなり、戦争のための兵器の開発ではなく、平和のためにその技術を使う世界にしなければいけないと思います。そして、私の誕生日が「原ばくの日」ではなく、「平和の日」になることを願っています。

戦争がうばっていったもの

大岡南小学校 六年

鈴木優花

私は家族を失ってしまったら、強く生きていくことが出来るのでしょうか。

この夏休み、私は戦争に関する実話書かれた本を読みました。主人公の敬子は、東京大空しゅうで、母と妹の二人を失い、父を目の前で失ってしまいました。それでも敬子の一生懸命に生きていく姿が、とても心に残りました。一人になってしまった敬子は、何も悪いことをしていない家族が殺されてしまい、とてつもない悲しみとイカリがこみ上げてくる中でも、前向きに生きる姿や、自分出来ることをやっていこうとする姿勢がすごいと思いました。

私が家族を失ってしまったら、きつとてつもない悲しみにおしつぶされて、自分を保っていけず、一生懸命に生きていくことも出来ないし、何も出来ないと思います。また、自ら命を絶ってしまいましたくなるぐらいの悲しみだと思います。それだけ家族というのはとても大切なんです。では敬子はなぜ強く生きていくことが出来たのかと考えた時、この時代は、敬子以外にも家族を失っている人が当たり前のように入ります。だから、声にその悲しさを出さずに強く生きることしか出来なかったのだと思います。

私は、もう一つ考えさせられたことがあります。それは、アメリカ兵が落とした物が、家族の写真だった場面です。私はここで、アメリカ兵にも家族がいることを思い出しました。日本兵に限らず、アメリカ兵にもそれぞれ大事なものがあって、みんなそれを胸に戦争に行っていたと思います。そして、見ず知らずの人と殺し合って、日本やアメリカ兵の大事な人たちをうばっているのです。そう思うと何も言えなくなりました。

なぜなら、日本だけがひ害者なのではなく日本もアメリカ兵を殺してしまっている加害者でもあり、アメリカも加害者でもなくてひ害者でもあるからです。

私たちは今、とても平和で戦争もありません。戦争は多くの物をうばっていったと思います。長い年月をかけて人々の笑顔もうばわれしました。そして多くのぎせい者がいて、日本のために命をかけてくれた人たちがたくさんいました。だからこそ、今の平和があると思います。今の平和は、昔の人たちが家族との別れのつらさを胸にしまいこみ、未来のために前を向いてがんばって、新しい日本をつくってくれたからこそあるのです。

そして今、私は大切な人が当たり前にいて、何不自由なく暮らせる日常があります。今、家族を失ってしまったら強くは生きていけないと思います。そう思うのは私だけではないと思うし、そんな悲しいことを二度とくりかえしたくないです。

そして、だからこそ、私はこの今の平和な日常を大切にしていきたいと思えます。